

# 気候正義のために信仰を持つ人々を組織 する



なぜ私たちは信仰を持つ人々を組織するのか？

環境破壊と気候変動に関しては、私たちは社会のあらゆるレベルで意味のある変化を必要としている。つまり、環境・気候正義運動に多くの人々を参加させる必要があるのです。

私たちの信仰／価値観はすべて、神／神は地球と人々を大切にすると語っている。神は弱者や疎外されている人々の味方である。信仰を持つ人々は、神／地球／人々のために行動を起こす。その行動は、信仰や地域によって異なる。

そして：信仰を持つ人々は、成功した社会運動において常に重要な役割を果たしてきた。私たちは、世界をより公正で思いやりのあるものにするために、強力な道徳的価値と権威をもたらします。私たちは人と資源を集め、世界人口の約84%を占めています。だからこそ、グリーンフェイスは信仰を持つ人々を組織しているのです。

信仰を持つ人々が運動にもたらすユニークなものは何か？

- 信仰の指導者は道徳的な力を持ち、信徒や多くの権力者に耳を傾けられている。
- 世界中で、政治家が当選するためには宗教指導者の支援が必要だ。
- 信仰を持つ人々は、社会の大多数が何が正しくて何が間違っているかを定義する方法をしばしば形成してきた。もし信仰を持つ人々が大勢で、新しい化石燃料プロジェクトの建設やそれらのプロジェクトへの資金提供は間違っていると断言し続ければ、その感情はより多くの人々に受け入れられるだろう。化石燃料に抵抗することが当たり前になるのだ。
- 信仰を持つ人々は、すでに組織化可能な共同体や信徒の一員である。
- 信仰心のある人は、自分自身の内面を見つめ、仕事を支えてくれる精神や "神" を見出すことができる。
- 気候正義のための世俗的なキャンペーンに信仰の人々を参加させることは、結果に大きな影響を与える可能性がある。私たちはキャンペーンを正当化する。私たちは信頼できる代弁者となる。気候正義のために闘う既存の連合を支援する。

気候変動に対する行動をめぐって、私たちはどのように信仰を持つ人々と関わっていけばよいのだろうか。

私たちは、宗教的・精神的な教えやリソースから始めることで、気候変動をめぐる他の信仰や精神を持つ人々と最もよく関わるができる。

ここでは、アルファベット順に、さまざまな信仰からいくつかの出発点を紹介する。

仏教: 仏教の多くの宗派は、私たちは地球のすべての部分にとってより公正な仕事を求めて、従事する人生を生きることを意図していると教えている。私たちは皆、互いにつながっている。その相互のつながりは、私たちが気候の不公平に注意を払い、対応することを要求している。[仏教に関するその他のリソースは、こちらをご覧ください。](#)

キリスト教キリスト教: 聖書(キリスト教で最も神聖な書物)は、神が万物を創造し、それを良いと言われたと教えている。私たちは、この世界で最も弱い立場にある人々の面倒を見るよう命じられており、それは気候[正義](#)のために働くことを意味する。

地球に根ざしたスピリチュアリティ: 地球のあらゆる部分に神が宿っている。私たちはすべて互いにつながっており、互いに、そしてすべての生き物を守らなければならない。地球、水、生き物、植物、すべてが重要なのです。創造物を傷つけるものはすべて止めなければならない。[ここにひとつのリソースがある。](#)

ヒンズー教: ヒンズー教の書物であるヴェーダは、水、大地、空気、樹木など、すべてが神聖であると説いている。ダルマはすべての生きとし生けるものの幸福のために存在する。気候正義はアヒムサのために働き、したがって私たちは行動を起こさなければなりません。[ヒンドゥー教に関するその他の資料はこちらをご覧ください。](#)

イスラム教コーラン(イスラム教徒の聖典)の中で、預言者(かれに平安あれ)は、地球とすべてのものは神のものであると教えている。忠実であるためには、私たちは地球と他の人々を大切にしなければならず、気候不公正(最も弱い立場にある人々を傷つける)を許すことはハラームである。[イスラム教に関するその他の資料はこちらからご覧いただけます。](#)

ユダヤ教ユダヤ教の教えは、神と神に選ばれた民、つまり律法と預言者やラビの教えに従うことを意味する共同体との関係に根ざしている。この文脈で、ティックン・オラムという言葉は「世界を修復する」という意味で理解され、気候正義を含む社会的行動や社会正義活動の代名詞となっている。[ユダヤ教に関するその他のリソースはこちらをご覧ください。](#)

気候正義のために働く上で、どのような教えやリソースがあなたを導いてくれますか？

東アフリカ原油パイプライン(EACOP)やその他の化石燃料プロジェクトに、私たちの信仰をどう生かすか？

EACOPが建設されるためには、政府が許可証を承認し、人々が土地の権利を放棄するサインをし、銀行や金融機関が建設資金を総計に提供する必要がある。

このプロジェクトは間違っている。大気、水、そして多くの人々が食料と生活のために依存している農地を汚染する。

建設の脅威にさらされている地域社会の宗教指導者たちを組織し、建設が地域社会に及ぼす健康や気候への影響を理解させ、彼らがプロジェクトに反対する声を上げるように仕向ければ、政府当局が許可を出すのはかなり難しくなるだろう。また、土地の所有者たちも、自分たちの土地の権利を手放す前に一歩を踏み出すようになるだろう。私たちはこの不公正について、宗教の観点から語る事ができる。私たちの精神的信条を共有する世界中の信仰を持つ人々も、タンザニアとウガンダの人々と連帯するために立ち上がるよう心を動かされるだろう。例えば、牧師や導師や信徒がパイプラインに抵抗する理由を語るとき、聖書やコーランの一節を引用すれば、世界中のキリスト教徒やイスラム教徒は、なぜ自分たちもこの闘いに連帯しなければならないのかを理解するだろう。

大きな影響を与えた信仰指導者の例：

ワンガリ・マータイ(ケニア／クリスチャン／地球ベース)

ワンガリ・マータイさんの物語は、彼女が1940年に生まれたケニア高地の小さな村イヒテから始まる。ワンガリの両親はキリスト教に改宗し、ケニアに住む主要な先住民族のひとつであるキクユ族に属していた。ワンガリはカトリック教徒として育ったが、彼女の家族の伝統的なキクユ族の信仰は、彼らの生き方や神についての考え方に影響を与えた。キクユ族は、アフリカ大陸で2番目に高いケニア山に、キクユ語で「ンガイ」と呼ばれる神が宿ると信じている。キクユ族はケニア山に面して家を建て、すべての善きものがどこから来るのかを日々思い起こさせた。

その後、彼女はグリーンベルト運動を開始し、主にケニアの貧しい農村部の女性たちによって、植樹のための組織的な取り組みを始めた。「植林は一種のエコロジー的な市民的不服従です」とワンガリは後に振り返った。彼女は、自分たちの懐が潤うような経済発展だけを望む政治家たちからのあらゆる抵抗に直面した.....ワンガリと彼女に参加した多くの女性たちの総力を結集して、今ではケニアをはじめ多くの国で5,100万本以上の木を植えている。

ケニアでは、木は平和の印であり、ワンガリがその活動を代表してノーベル平和賞を受賞したことは、特にふさわしい。受賞スピーチの中で彼女は、世界中で起きている紛争の多くは、実は生態系の危機が原因であると説明した。木を植え、自然のバランスに注意を払うことは、しばしば暴力に発展する大きな紛争を減らすのに役立ちます。(https://www.holytroublemakers.com/wangari より抜粋)

#### チップコ運動(インド／ヒンドゥー教)

今では世界的に知られるようになったチップコ運動は、ガンジーの非暴力社会行動、サティヤーグラハ(「真実の力」)から発展したものである。インド独立後、マハトマ・ガンディーの側近であったイギリス人女性ミラ・ベーンとサララ・ベーンは、ヒマラヤの異なる地域に定住した。彼女たちは村の開発に取り組むうちに、環境問題が深刻化していることに気づいた。彼女たちは、ガンジーの活動家であるスダーラール・バフグナやチャンディ・プラサド・バットらとともに、1960年代にウッタラーカンド地方のサルヴォダヤ運動(「万人の向上」運動)を結成し、ガンジーのスワデシ(自立)の原則を適用した。この運動による活動の大半は、樹木の伐採を禁止し、樹木を「聖職者」として任命して保護することであった。また、チップコの労働者たちは早くから森林再生プロジェクトにも着手した。この運動はヒマラヤ地方を経てインドの他の地域へと広がり、その方法を他の文化的・生態学的状況に適応させていった。

(https://fore.yale.edu/World-Religions/Hinduism/Engaged-Projects/Chipko-Movement より抜粋)

#### 南部キリスト教指導者会議(米国／黒人キリスト教徒)

非暴力抵抗によって「アメリカの魂」を救済することを目標に、南部キリスト教指導者会議(SCLC)は1957年に設立され、南部各地の抗議グループの行動を調整した(King, "Beyond Vietnam," 144)。マーティン・ルーサー・キング・ジュニアの指導の下、この組織は黒人教会の力と独立性を利用して活動を支えた。「この会議が召集されたのは、1957年1月、キング牧師が同僚の牧師であるC・K・スティール、フレッド・シャトルズワースとともに、「神の御前で、闘争をより深く掘り下げる以外に道義的な選択肢がないからであり、非暴力に一層依存し、団結、協調、分かち合い、キリスト教的理解を深めてそうするためである」(Papers 4:95)と書いている。

SCLC結成のきっかけはモンゴメリー・バスボイコットだった。1956年のボイコットの成功を受けて、バヤード・ラスティンはモンゴメリーでの活動を南部の他の都市に拡大する可能性について一連の作業文書を書いた。これらの論文の中で彼は、これらの活動を調整する組織が必要かどうかを問うた。キング牧師は助言者たちと議論を重ねた後、南部の黒人牧師たちをアトランタのエベニーザー・バプティスト教会で開催された「交通と非暴力統合に関する南部黒人指導者会議」(後に南部キリスト教指導者会議と改称)に招待した。参加した牧師たちはマニフェストを発表し、南部の白人たちに「黒人の扱いが基本的な精神的問題であることを理解するように.....あまりにも多くの人々が、黙って傍観してきた」(Papers 4:105)と呼びかけた。さらに彼らは、アメリカ黒人に「正義を求め、あらゆる不正

義を拒絶する」よう勧め、「いかに大きな挑発があろうとも」(Papers 4:104;105)非暴力の原則に身を捧げるよう勧めた。(抜粋と全文引用は[こちら](#)：

<https://kinginstitute.stanford.edu/encyclopedia/southern-christian-leadership-conference-sclc>)